

## 活動内容報告

岸川 和弘 医師

石渡 大輔 看護師

濱井 優花 看護師

小笠原 一彦 業務調整員：臨床検査技師

日下 亮子 看護師(当院 DMAT として協定締結)



【出発時：並木病院局長が激励】

### 派遣要請 1 月 7 日(日)

厚労省 DMAT 事務局⇒北海道⇒DMAT 病院および DMAT 各隊員へメールと FAX

指示要旨

1 月 8 日(月)10 時に現地参集

現地では、宿泊先・トイレなし 食糧調達不可

病院での寝泊まりのため寝袋用意

出動準備

全行程でレンタカー (ハイエース グランドキャビン) を使用

派遣要請通達に沿って、携行資機材を準備

各隊員の飲料水・非常食・寝袋・簡易トイレ・感染防護セット・走行時の不慮のパンクに対応するための器具、インフルエンザ・新型コロナ感染症簡易検査キットや各隊員用の予防投与

のためのタミフルを準備。



【個人装備の一部 右端はモバイルバッテリー】

## 1月10日新潟港に到着

北陸自動車道は路面には、異常なかったが、やや渋滞気味であったため、移動に時間を要した。17:00頃、能登医療圏 DMAT 活動拠点本部より連絡があった。明るいうちに参集できない見通しであり、富山付近で宿泊し、翌朝に参集するように指示変更があり、富山市で一泊した。

## 1月11日(木)

7:30に七尾市 能登医療圏 DMAT 活動拠点本部（能登総合病院内）に参集した。七尾市へ向かう、国道249号線に入ると、途端に、路面状況は悪化、段差や陥没が至る所にあり、慎重な走行が必要であった。能登半島へ入った、第一印象は、被害を揶揄する意向は毛頭ないが、バラバラになったジグゾーパズルのような状況で、瓦礫の上に瓦礫がかさなり、被災された方の心情をおもんばかりであった。

活動の様子(ピックアップ)

拠点：能登中部医療圏活動拠点本部（能登総合病院内）

活動場所：福祉施設

### 一日目

七尾市、介護老人保健施設 寿老園が建物被害のため、今後、施設利用不可となる可能性が大きくなっていた。他施設への移送のために、入居者87名のリスト作成と移送優先順位を作成することがミッションとなった。

施設は、建物全体が地震のため、横に変移しているような状態であった。電気は通っていたが、断水。職員は施設に寝泊まりしている方もおり、入居者の食事調理にも苦勞している様子であった。特に長期間、入浴や口腔内ケアができず、介護度が高くなることを懸念していた。

入居者のカルテを参照し、主疾病や介護度を参照し、優先順位を決定、また、移送の際に、重要な点となる、担送・護送・自力歩行可などの情報をピックアップ。リスト作成中に施設担当者から、建物の雨水配管の修理を手伝って欲しいとの依頼があった。“DMAT の仕事でないものはないーすべて被災地のために何でもしなければならない”

リスト作成後に、石川県職員より連絡があった。搬送リストの上位 10 名が 3 時間程度の移送に、身体的に耐えられるかを DMAT で診察して欲しいという依頼であった。10 名の診察後に、家族に連絡がつき、移送の了解を得られた 4 名を行政手配のマイクロバスで、新潟県長岡市の 1.5 次避難所へ移送できた。



【活動一日目の介護施設、実は施設建物は著しく損傷】

## 二日目

七尾市 能登医療圏 DMAT 活動拠点本部（能登総合病院内）に参集

七尾市内 福祉施設の巡回（全 60 施設を 10DMAT チームで分担）。

グループホームなどの小規模福祉施設は、七尾市の山間部に点在しており、まだ行政の支援が不十分であったため、DMAT の機動力が期待された。医療ニーズの確認と必要物資をあらかじめ確認し、手持ち資機材あるいは七尾市役所の支援物資配布ステーションから調達して運搬した。我々の DMAT チームは、灯油・消毒薬などを届けた。その他のチームでは簡易トイレ（ラップポン® 日本セイフティー株式会社）やインフルエンザ検査キットやオムツなどを運搬していた。

情報収集の過程では、トイレ問題への対応、食事関連では毎日のレトルト食品ばかりでなく、野菜が食べたいなどの切実な要望が多く聞かれたが、我々がすべてに対応することができない歯がゆさを強く感じた。

## まとめと今後の課題

今回の、能登半島地震への派遣は、小樽市立病院 DMAT としては、初めての被災地派遣に

よる活動であった。2011年東日本大震災の当時は、当病院にはまだ、DMATは発足してなく、自治体病院医療支援チームとして合計3回派遣された。(DMAT発足は2013年)2016年熊本地震では、派遣に手を上げたが、自衛隊輸送機による派遣のため、チーム数に制限があり、残念ながら自衛隊輸送機に搭乗できなかった。2018年北海道胆振・東部地震では、当院DMATは、小樽市立病院で、DMAT後志活動拠点本部を運営、後志および小樽市の核となり、小樽市立病院の機能維持にも専念した。このように、DMAT発足から10年目で、北海道外の被災地へ派遣され、多くの経験と知見をいただいた。その中で見えた課題をいくつか述べたい。

## (1) ダウンサイジング

今回のように、長期にわたる断水が生じている場合、被災地では医療を継続できなくなる可能性が大きい。しかし、東日本大震災で経験したように、病院の完全な撤退は、撤退するための膨大な戦力が必要であり、復興しても病院再開への長い道のり、あるいは撤退中の患者容態悪化や最悪な犠牲が起きること、などが明らかになっていた。そこで、今回の能登半島地震では、完全な撤退・避難ではなく、病院・福祉施設の機能維持のために、患者・入居者を減らすダウンサイジングの戦略が行われた。我々が携わった一日目の福祉施設でも、ダウンサイジングを目指していた。また、珠洲市総合病院では150床から20床へダウンサイジングを行い、病院機能を最低限維持して、病院籠城戦略を選択していた。

この珠洲市総合病院のダウンサイジングには、多くのDMAT車両が活躍した。患者搬送能力がある、病院救急車や専用のDMATカーが利用された。

小樽市立病院のDMATに欠如しているのは、このような機動力かもしれない。小樽市立病院DMATの次の10年の目標として、病院救急車の装備拡充やDMATカー導入、そのためのDMAT隊員の補充などを考えていきたい。

## (2) 災害医療のIT戦略

内閣府においても、災害対策にAIの活用を推奨していくようである。

今回我々も、派遣中の北海道DMAT用グループLINEによる情報共有とサポート体制、第一日目のGoogleアンケート機能の利用、第2日目のkintoneアプリやGoogle driveへの情報入力、従来から使用しているDMAT活動の要としてのEMIS機能など、活動中の新しいIT戦略駆使をいくつか経験した。これらの新戦略のリアルタイム性や共有の容易さには、おどろかされたが、同時に使用方法の熟練が必要、かえって複数の入力業務が強いられるなどの課題も浮き彫りになったようである。おそらく、今後の検討や訓練などでの検証が待たれるであろう。



【スマホを用いたリスト作成時の活動風景】

### (3) DMAT 自体の厳しい環境への対応

派遣要請指示で提示された、食糧・水の調達不可、トイレも持参、病院泊の覚悟など、大変厳しい被災地の環境が予想されていた。もちろん、被災されている方が、最も厳しい環境に、出口の見えない長期間を強いられていることに異論はない。しかし、短期間とはいえ、安全な医療支援を行うために、DMAT 隊員の災害環境への適応力を高める必要があるかもしれない。たとえば、フェリーなどの船舶を利用した、支援チームへの宿泊施設（1/15 前後からフェリーが七尾港に停泊して、支援チームへの宿泊提供が開始された）、また、複数の場所に、医療支援資機材を集積したハブを設置し、各 DMAT は軽装備で迅速に現地へ向かうことができる体制などが検討されることを願っている。実際に都立病院 DMAT チーム（7-10 病院）は、富山に前線基地を作り、資機材を集約させていた。私事であるが、私はキャンプやアウトドアが苦手で、一度も寝袋で寝たことがなく、これが1番の心配事であった。申し訳なく思っている。

### (4) 働き方改革・職場と家庭の支援・小樽市立病院職員として派遣される自覚

DMAT の働き方改革も考えてみたい。DMAT 派遣には、職場の大きな支援と家族・家庭の支えが必要である。個人が旅行に行くのとは違い、スムーズな準備・出動には、多くの方々の協力が不可欠である。それらに、感謝した上で、DMAT 隊員はボランティアではないという認識の上で、DMAT 隊員への何らかのインセンティブを考える時代ではないだろうか？この中には、派遣後のクールダウン期間としての十分な公休制度も考慮に値するであろう。インセンティブの具体的な方法は、各医療機関で、今後、議論していくことを希望する。また、今回の出動で、訓練では考えもしなかった、DMAT 隊員の被災時保証が明文化されていない

ことに気づいた、日本 DMAT 活動要領や北海道 DMAT 設置運営要綱でも、明らかな記述はない。ただ厚労省では、派遣自治体が病院との協定により保証するとだけ記されているのみである。今後、本災害が落ち着いた時点で、小樽市立病院としても、北海道と DMAT 隊員の災害補償を協議し、明文化していく予定と伺っている。

最後に、最も大事な事であるが、DMAT 派遣は、小樽市立病院職員として派遣されているということを忘れてはいけないことである。被災地での活動姿勢、生活マナー（派遣 DMAT は被災地でのコンビニ利用は控える、依頼された仕事は拒否しないなど）、これら以外にも小樽市立病院職員の代表として派遣されているという矜持を持ち続けることが大切であると感じている。そのことが、これからの小樽市立病院 DMAT が病院職員と小樽市民から信頼され応援を受けるために必要なことであると信じている。

末尾であるが、能登半島地震で被災された方へのおくやみと、お見舞いを申し上げ、1 日も早い復興を願っていることを付記する。



【活動 2 日目、小雨降る被災地にかかった、希望の虹】